12. 都道府県単位の平均寿命別にみた国民健康・栄養調査結果における生活習慣の推移

研究分担者　西　信雄　（医薬基盤･健康･栄養研究所国際栄養情報センター　センター長）
研究協力者　北岡かおり（滋賀医科大学 NCD 疫学研究センター予防医学部門　特任助教）
研究協力者　近藤　慶子（滋賀医科大学 NCD 疫学研究センター予防医学部門　助教）
研究分担者　門田　文　（滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門　准教授）
研究協力者　中村美詠子（浜松医科大学医学部健康社会医学講座　准教授）
研究協力者　佐田みずき（慶應義塾大学医学部衛生学公衆衛生学教室　助教）
研究分担者　尾島　俊之（浜松医科大学医学部健康社会医学講座　教授）
研究分担者　岡村　智教（慶應義塾大学医学部衛生学公衆衛生学教室　教授）
研究分担者　由田　克士（大阪市立大学大学院生活科学研究科　教授）
研究代表者　三浦　克之（滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門　教授）

【目的】

国民の生活習慣やリスク要因は時代とともに変化しており、地域や世代間の格差が生じると考えられる。本研究は、日本国民を代表する標本による国民健康・栄養調査（国民栄養調査）の 20 年間のデータ推移分析により、国民の生活習慣の変化、地域格差の要因を明らかにし、生活習慣病予防のための最新の優先的課題を明らかにすることを目的とした。

【方法】

1995-2016 年のうち 14 年分（1 期 : 1995-97 年、2 期 : 1999-2001 年、３期 ; 2003-5 年、４期 2007-9 年、５期 2012 年、６期 2016 年）の国民健康・栄養調査（国民栄養調査）の 40-69 歳を分析対象とした。2000 年の平均寿命別に都道府県を 4 群（平均寿命が高い方から男性 : M1-M4、女性 : F1-F4）に分類し、生活習慣（喫煙、飲酒、歩数）の推移を比較した。2010 年の 10 歳階級別人口に基づき年齢調整した。

【結果】

男性の喫煙率は 1 期から 6 期まで低下傾向にあり、5 期と 6 期で M1 が低値を示した以外は、4 群間で明らかな差を認めなかった。女性の喫煙率はわずかながら上昇傾向にあり、F4 が他の群と比較して高い値で推移する傾向を認めた。男性の歩数は減少傾向にあり、M1 が他の群と比較して高い値で推移する傾向を認めた。女性の歩数は 2 期以降減少傾向にあったが、4 群間で明らかな差を認めなかった。男性の飲酒者の割合は低下傾向にあり、M4 が高い値で推移する傾向を認めた。女性の飲酒者の割合は上昇傾向にあったが、4 群間で明らかな差を認めなかった。平均飲酒量は男女とも、平均寿命の長い群がやや低い値で推移する傾向を認めた。

【考察】

日本国民を代表する標本による国民健康・栄養調査の 20 年間のデータ推移分析により、都道府県単位の平均寿命別に生活習慣の差を明らかにした。今回の分析では統計学的検定を行っていないため、結果は主に推移について記述するに留めた。なお、問診内容の変更により、飲酒については 6 期を通じての推移を比較することができなかった。

【結論】

喫煙や飲酒、身体活動が平均寿命と関連している可能性が示唆された。今後、平均寿命だけでなく、疾患別の死亡率との関連などを検討する必要がある。

第 57 回日本循環器病予防学会学術集会（2021.5.28～6.15 WEB 開催）